大地

第　55　号
2017.5.20.発行

浄　國　寺
上越市寺町3丁目14-10
☎025-523-5724

【俳句】

山崎　睦

木蓮の早ふふみ初む花芽葉芽

喜寿を祝ぐ縁の旅をいただきて

旅も好き晝寝も好きで恙なし

起きぬけに見る万緑の眩しかり

きりぎりに枝を撓めて梅を椀ぐ

手入れよき満天星垣に土用の芽

句集『朝の光』より
平成五年（一九九三）

御恩送り

山崎隆史

「情けは人の為ならず」ということわざがありますが、これを「人に親切にするのは人のためにならない（だから親切にするべきではない）」という間違った理解をしている人が結構多いそうです。正しくは「人に親切にするのは人のためではなく、自分のため」という意味です。

親切にするという事そのものをこころよく感じるという事もあるかも知れませんが、親切が巡り巡って自分のためになるという意味の方が強いと思います。

学生時代や社会人になりたての新入社員時代、先輩におごってもらったり何かやってもらったりして、お礼を言い何かお返ししようとすると、「返すのではなく、自分が先輩の立場になった時に、後輩に同じようにしてやれ」と言われる事がよくありました。

旅先で親切にしてもらった人がお礼を言うと、「自分が旅先で親切にしてもらったから、同じように旅人に親切にしているのだ、あなたも地元に帰ったら旅人に親切にしてあげて欲しい」と言われた、という話も聞いた事があります。

こういう行為を指して「恩送り」というそうです。受けた恩を当人に返す「恩返し」でなく、恩を受けたらそれを不特定多数の他人に送る、という事です。

日本に特有の習慣という事でもなく、他の文化でも見られるようです。英語では「Pay it forward（ペイ・イット・フォワード）」というそうです。

ところが、利己的な人が増えてくると、「恩送り」が無くなっていってしまいます。

ある国のニュースで、ひき逃げの被害者を助けた人が、当の被害者に加害者として訴えられてしまった、というのがありました。証拠があったため被害者の嘘が明らかになり、「ひき逃げ犯は逃げてしまって捕まるかどうか分からなかったので、助けてくれた人から賠償金をせしめようとした」と白状したということです。まさに「恩を仇で返す」所業です。助けた相手に訴えられてしまった人は「もう二度と人を助けない」と言っていたそうです。

このような事が増えると、恩を受けても感謝したり、恩に報いようとしたり、他人に親切にしようとしたり、という事は無くなっていき、結局殺伐とした生きにくい社会になってしまうことでしょう。

恩を受けて恩を返せる、親切にされ、また別の人に親切にできる、というのはありがたい事なのです。

山崎 睦 句集『朝の光』の出版

山崎 隆昌

寺報『大地』には毎号、七句から十句ほど母の俳句を載せてきました。身びいきですが、俳句は読者諸氏からも好意をもって読まれているようです。

母が亡くなったのは、平成二十三年東日本大震災の年の二月、六年の月日が流れます。去る五月四日縁ある人々からお集まりいただき七回忌の法要を営みました。この法要の記念として、前々からの懸案であった母の句集を出版したのです。

母の俳句作りは、六十五歳を過ぎてから、九十五歳で亡くなる直前までおよそ三十年間熱心に励みました。指導者にも、また良い仲間にも恵まれ、作品は大学ノート、句帳、手帳など、小型の段ボール箱一杯に残されています。整理すれば良いのですがとても手が出ません。

俳句を始めたのは、父の師範学校時代からの友人である高橋釣石先生から勧められたことがきっかけで、その後高橋先生から時折指導を受け作っておりました。

本格的には、七十歳を過ぎ、堀前小木兎先生主催の俳句教室に参加してからです。堀前先生は上越俳句界の重鎮、気さくなお人柄で、長年浄國寺報恩講にお話をして頂いておりました。馬が合ったのか十六年も堀前教室に通い続けることになります。

教室では毎年、生徒一人二十句掲載の作品集を一冊にまとめ発刊されましたが、この度の句集もこの作品集をそのまま整理しなおしたものです。

母は生来、好奇心旺盛、心身ともに軽やかで、またメソメソすることが嫌い、割り切りもすこぶる良く、お茶目さんでもありました。

一方結婚してから晩年にいたるまで、戦中戦後を通して、寺のこと、次々途切れることのない家人の看病、子育て、家事全般、貧乏ゆえの金の工面など、ひたすら働き続けたのです。母の作品に見る軽やかさと、人や自然への優しさに、それを感じます。

母の長い俳句作りは

夜の雪も朝の光にとけそめぬ

の句で終わります。命終一カ月余前、ベットの脇で私が聞き書きした作品です。句集の題「朝の光」はこの句によります。

ささやかな句集ですが、母とご縁をいただいた方々にお届けできることはありがたく、嬉しく、よろこびでもあります。

また句集出版にあたって、何も知らない私たちは、すべて北越出版の佐藤さんにお任せし、限られた時間の中、ご無理を申しあげ、ご苦労をおかけしました。今はただ感謝するばかりです。

『川島昭恵語りの会』中止のお知らせ

平成十三年より十五年間続けて開催して来た『川島昭恵語りの会』ですが、諸般の事情で本年は中止します。

毎年、本堂一杯の百名を超える人々からお集まり頂き熱気溢れる「語りの会」を催して来ました。とても残念です。

安房直子、宮沢賢治、杉みき子等の作品による川島昭恵さんの語りは、聴く者のこころに響き深く染み入る素敵なものでした

本年も『第十六回川島昭恵語りの会』を開催すべく、準備を進めて来ましたが浄國寺の事情から中止せざるを得なくなりました。

川島さんも公演を楽しみにされておられ、「語りの会」を期待されていた多くの皆さまに、中止のお知らせをすることは、残念で、申し訳なく思います。

何とか来年は再開出来るよう今から努めたいと考えておりますが。

取りあえず「語りの会」の中止のお知らせを致します。

《遺稿》

二条城と金原省吾先生の歌

前々住職　山崎　武雄

金原先生は、良寛を日本人として最も美しく生きた人として生涯景仰された。新大芸能学部教授として登校される時も、飄々として和服筒袖にモンペ姿だった。先生は美学を中心に、美学史などを講ぜられたが、上越地区などでも新しく価値ある仏像などを発見鑑定して下さった。何より学究としての態度が、学生、一般社会人に深い感銘、印象を与えられた。

金原先生が二条城を見られ折りに詠まれた歌が三首あるが、これは今も私に考えさせられるので、ここに書いて見る。

二条城は、京都二条の繁華街に広大な二十町歩以上の敷地を占め、堀を巡らし、石垣土手の樹々につつまれた立派な城である。建立されたのは徳川将軍家の基礎も確立した時で、もう天下は平定され、軍備上の城としてではなく、将軍の威容を示すため造営されたものである。

京都観光にお出かけの方々は、何処より先にここを見られご存じなので、その結構については一つ一つ書かないが、建物は金殿玉楼、桃山文化の粋を集め、庭園もまた市中に居るというより、山中に居るという感さえ覚える。まさに広大にして幽翠なるものである。

しかし、金原先生の詠まれた三首の歌は、なかなか厳しい。

◎かかる家を持つことのみを喜びし
　将軍の心われはあわれむ

江戸城に対して、二条城は京洛の地の別荘扱いにし、男子禁制の奥の間に多くの女人にかしずかれ、安逸をむさぼり、太平の夢を追い一般庶民の生活など目を向けなかった将軍をむしろあわれな人と思われた。

◎池の辺に石多くしてわずらわし
　物の過剰を喜びてありけむ

二条城造営の事伝わるや、諸国、諸大名は競ってその国特産の建築材（桧、欅、杉など）と共に、造園の大小無数の奇岩、怪石、珍石、庭木等を献上した。その形態、色も白、緑青、赤色その他、枝振り、葉振りの美しき松、杉、桧、藤、桜、梅などである。

二条城庭園は、一世の名人小堀遠州の作と言われるが、これにはその取捨選択、配置に苦労したと伝えられる。

それが今、満々たる水をたたえた石の庭園築山、回遊式の庭であるが、先生は枯淡さのなき事をなげかれている。

◎物の多きを豊かなりと思いつる
　心の虚しさ知らでありけむ

三首目に先生は、はっきり私共に物の多きのみを求めほこる心の虚しさを戒めて居られる。

戦前、戦中、戦後の物資不足の時代の苦しみを抜けて来た為もあるが、衣食住とも物資豊かになり、機械化と共に生活態度は一変した。

唯々時流れまい、遅れまいとして、家を建て直し、食生活、衣生活を変え、全生活の機械化を喜び、レジャーを追い、入手し難き珍奇の品をひたすら求め誇る。人伝えに聞いた話だが、東京では日本酒の「越乃寒梅」「雪中梅」など、雪の越路より出荷の少ない酒が珍重され、その入手に目の色を変えているとか実にどうかと思われる。

私は、金原省吾先生の歌をもう一度読み直し考えたいと思い、あえてこの一文を草して見ました。

昭和五十六年二月五日

父武雄の命終は昭和五十六年五月二十三日本文は亡くなる三カ月前に書かれたものである。自らの死を前にあえてこの一文を草したのだろう。この年正月に詠んだ俳句は

命噴く季待つ欅雪晴る　武雄　（隆昌記）

ワン公物語⑮

―華のつぶやき―

山崎　華（慎子代筆）

私は華。もうじき十才になるパグ犬の雌。珍しく早起きした母さんが、いつになくテキパキ仕事をこなし、私の目の手入れも済ませて、気もそぞろにどこかへ出かけた。

私の目の手入れというのは、ドライアイの進行を押さえる為で、これがまた私にとっては大っ嫌いなことだから、できるだけの抵抗を試みる。母さんが水を含ませたコットンを私の目に近づける。

「ヤメテ！母さん。それ大嫌い」二本の手をバタバタさせて必死の抵抗を試みる。「そんなこと言ってもね、これはやらなきゃいけないことなの。先生に言われたでしょ。悪くなることはあっても、治るということはありません。放っておけば目玉をとるようなことになりますよ」って―

ヤダ。手入れも厭だけど目をとられてしまうなんてのは困る。何てったってこのこぼれ落ちそうなクリクリの瞳は、私たちパグ犬の誇らしい特徴、トレードマーク、自慢のイッピンなんだから。

結局、強力な看護助手に変身した父さんが私の手を押さえ込み、まず目ヤニがふき取られ、しかる後に点眼液と軟膏を注入して完了。ついでに鼻の上の深い溝になっている所の汚れを拭きとって、やっとこさ解放されるのだ。ただこの後に「はな、良い子だったねー。ハイごほうび」といって食べさせてくれるオヤツが、たった二粒か三粒だけど、とても嬉しくて美味しい。

でも今日の母さんは気もそぞろに、私の楽しみをすっかり忘れて二階へ消えてしまい、そのまま何処かに出かけてしまった。ほんの二粒とは言え、私にとってはすごーく貴重で楽しみなおやつを忘れて、母さんは何処へ行ったというのだろう。マ・イイか！。

結局母さんは京都方面に出かけたのだった。今年早々，母さんの親友アイさんの連れ合いが急逝したのでそのお悔やみに行ったのである。実は昨年十二月に、アイさんのお宅を訪ね二晩泊めて頂いて、ご夫婦と楽しく過ごしたばかりだったのだ。（当然その時も私はお留守番さ）

アイさんご夫婦とは、学生時代のこと、それからの様々、今のあれこれを、どちらからともなく会話は始まり、途切れる事なく続き、母さんにとっても豊かな穏やかな時間を共有したのだった。

訃報が届いたのは年明けの半ばのことだ。「慎子さん、主人が忽然と行ってしまいました」

母さんはこの一～二年。親しい人を何人も見送っていた。中には耐え難い辛さを伴う別れも幾つかあり、多分その為に私は幾度も母さんにギューッと抱きしめられた。

「母さん苦しいヨ。何がそんなに悲しいの母さん、あの人は今苦しみや辛さから解き放たれてきっと楽になったんだよ。今は皆のことを見守っていてくれるよ〃その時〃が来る迄しっかり生ききってネって」私は偉そうかな、とは思ったけど母さんに語りかけた。その効きめがあったかどうか、母さんは本を読んだり、人と会い、音楽を聴く日常生活を送る中で、その悲しみや辛さを洗い流しているようだった。

そして四月の初め、私を残して母さんは京都へ。四カ月振に会うアイさんは思いの外元気で、相変わらず東奔西走の毎日の様子。仕事が全国区のアイさんは、北海道から沖縄まで日本中を駆け巡っている、と母さんには見えるんだって。

早速、母さん達はお内仏に手を合わせ「正信偈」を唱和した。仏教讃歌の指導に生涯を尽くした彼の遺影は合唱指揮をしている素敵なもの。それを眺めながらしばし想い出を語り合ったんだそうな。

私だって行きたかったのに。マ・イイか！

（以下　次号）